

名古屋市

西部地域療育センターだより

No.23

正面壁画「友情」より

夏が終わって

所長 鷺見 聡

子どもたちの夏休みといえば、昔はカブトムシやクワガタ捕り、水遊び、海水浴などが中心で、夏の自然を満喫することが多く、日焼けした顔は元気な子どもの象徴でした。あいにく今年の夏は記録的な猛暑でした。各地で、35度以上の猛暑日や熱帯夜の日数の新記録となり、熱中症で倒れた人、救急車の

出動回数も例年以上でした。これ程暑くなると、どうしても室内で過ごすことが多くなります。ようやく夏が終わり、心地よい季節の到来です。外でスポーツをしたり、野山にいたりして、秋を楽しみたいものです。

平成22年度西部地域療育センター連続講座（平成22年7月2日）

— 子育て・子育てと親の心 —

名古屋市児童福祉センター所長 金山 学（小児科医）

はじめに

日頃感じていることですが — 障害のある子どももそうですが、障害のない子どもにおいても — やはり近年子どもを育てていくということはかつての時代に比べると何かが変わってきている。扱いの難しい子どもが増えてきている。そのなかには発達障害の子もいるけれどもそうではない子どももいる。また、親の側の気持ちも変化してきている。これは一つには時代背景の変遷ともやはり重ね合わせて考えていかなければならない部分もあります。

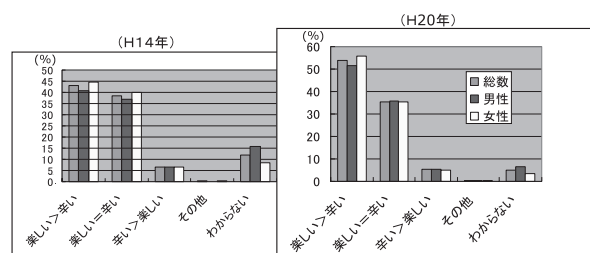
子どもの行動から社会背景、さらには親の気持ちという様々な角度から、私がいろいろなところからデータを集め、私自身が感じたこと、整理したことをお話ししていきたいと思います。

1) 子育てに関する事柄の近年の動向から

まず、親の気持ちはどうなのだろう、ということですが、内閣府の平成14年と20年の調査でどういう変化があるのか、というのが下の表です（図1）。

図1

子育ての楽しさ・辛さ（内閣府調査）



「子育ては楽しい」と感じている人は、平成14年より20年のほうが少し増えている。「楽しい＝辛い」は少し減っている。「辛いほうが多い」という人はそんなにいないのはよかったかなと思います。

平成20年の調査では、子育ての楽しさについては、「子どもの成長に立ち会える」が70%近く、「家族の絆が深まる」、「子育てを通じて自分が成長できる」と続き、それなりにきちっと考えているお母さんが多いと言えます。

子育ての辛さについては、14年の調査から「教育にお金がかかる」という家計的に辛いと回答するのは男性が多く、女性は「体力や根気がいる」、「自分の時間がなくなる」が多くなっています。

この辺は、子育てに直接関わるのはお母さんが多い、ということを示していると言えると思います。さらには「思ったように働けない」、「子育ての大変さを分かってもらえない」という回答が多くなっています。

次に、子育て支援情報誌から、子育て支援センターを利用する母親たちの今日の特徴をふたつあげたのが下の表です（表1・表2）。

表1

子育て支援センターを利用する 母親たちの今日の特徴①
◆ 高学歴で仕事のキャリアがある。子育てでは多くの情報を持っているが、現実体験が不足していて子どもへの対応に戸惑っている。 ⇒子育てに困っているが指導されたくない
◆ 自宅では、片手に赤ちゃんを抱き、反対の手で、マウスをクリック。
◆ 広場にいる間、ずっと携帯を見ているお母さん。
◆ 便利な世の中になり、子育てという「手間ひま」のかかる生活に悪戦苦闘。
◆ 情報の洪水の中で子どもにあれもしたいこれもしたい、と考えれば考えるほど育児不安が増す。

子育て支援情報誌 No.15(競輪補助事業)より引用

表2

子育て支援センターを利用する 母親たちの今日の特徴②
◆ ママたちは皆、一生懸命。でもなぜか苦しうに見える。
◆ 6ヶ月健診。ママたちの円座の中を一人の赤ちゃんがハイハイして横断した。その子のママの誇らしげな笑み、周りのママたちの目には嫉妬と羨望、そしてあせりの色。
◆ 育児情報や周りの意見に翻弄されてママたちは四苦八苦。健診でもチェックされ、祖母などからもプレッシャー。
◆ 頼りにすべき実家の不在や機能不全。実家が遠い、実家の祖父母は離婚、居ても祖母は働いていて思うように助けてもらえない、甘えられない。
◆ 夫の幼さ。自分の趣味に没頭、甘えて妻に母を求める夫。些細なことにイライラして怒る夫。経済観念のない夫。子どもと夫の両方を育てる気力はない。

子育て支援情報誌 No.15(競輪補助事業)より引用

情報が氾濫していて、知ってしまうと、あれが足りない、これがしたいと、考えれば考えるほど育児不安

になるという社会情勢にあり、お母さんたちはみんな一生懸命なのです。

社会構造の変容としては次のようなことがあげられます。（表3）

表3

社会構造の変容
●少産、少子化、豊かさ
●家族関係や地域社会の絆の希薄化
●子どもの扱い経験の乏しい親世代の増加
●養育力の低下、児童虐待問題
●情報過多、電子メディアの普及
●ストレス社会
●地域から子どもの遊び場が失われていく
●子どもの遊びの変容 (多人数遊び ⇒ 一人遊び)

このなかで、情報の過多、情報の洪水の中、情報を上手に利用するためには知識がなければ振り回されてしまい、増えすぎた情報は不安とマニュアル化をもたらします。

電子メディアの普及は、テレビ・ビデオの長時間視聴、テレビゲームへの執着といった影響があり、同時に対面的コミュニケーションの減少を招きます。

ストレス社会については、右肩上がりの時代でなくなり、大人の休息の時間が少なくなって時間に追われるという現実があります。また、自然とふれあって遊べる場所が減少したことから、遊び自体の変化として、一人遊びが多くなることによって社会的能力が育ちにくくなっていると言えます。

昔の子どもの遊びの例をあげてみました（表4）。

表4

昔の子どもの遊び

広場や山、また路地などで群がって遊んでいた。
できるだけお金をかけないように、いろいろ工夫
をして遊んでいた。

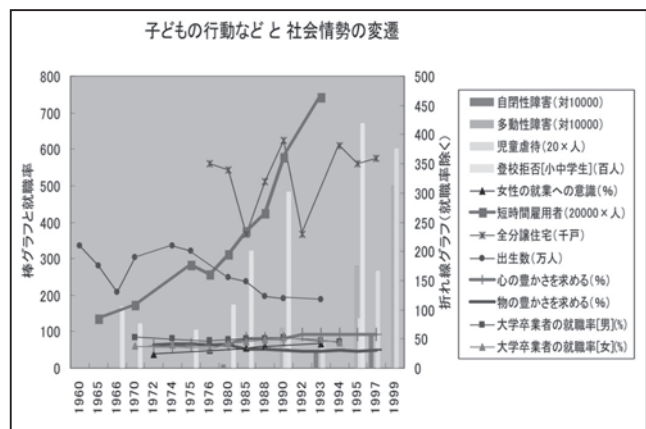
生き物	カブトムシ・せみ捕り、魚釣り、蝶・トンボ
体を動かす	石蹴り、陣取り、竹馬、馬乗り、三角野球、 風揚げ、縄跳び
勝負ごと	べったん、メンコ、ビー玉、ペーゴマ
ごっこ遊び	かくれんぼ、鬼ごっこ、チャンバラ、こま回 し、肝試し
工作的	紙飛行機、竹トンボ、糸電話、楠球鉄砲
女の子	ままごと、あやとり、おじゃみ

これをみると、昔の子どもの遊びはお金をかけない遊びであり、工夫をして遊んでいた。ごっこ遊びはみんなとの気持ちのつながりを育んでいたものといえます。このなかの遊びでいくつ残っているのでしょうか。こうした遊びを保育園や幼稚園で組み入れていただければよいのではと思います。

次のグラフ（図2）は10年前に、ある講演の資料

として私が作成したのですが、20～30年前から自閉症（自閉症スペクトラム障害）の増加傾向が見られ、その原因論に関して、何か単一の原因があることが前提のようにして多くの研究者や臨床家が研究を重ねてきました。これに対して私自身は、自閉症の増加に単独の原因があるのではない、社会現象にかかわる多くの要因から何か分かることがないかと考えていまして、このグラフのような項目をいろいろな資料から持ってきて比較してみました。実は、1980年代から、自閉症以外のものも増えているのです。

図 2



このなかで「こころの豊かさを求める」人の割合は、80年代は50%以下だったものが、90年代になると50%を超えるようになり、「物の豊かさを求める」人は、80年代の50%から下がってきて40%を切るようになりました。80年代から、「物」から「心」の豊かさを求める転換がみられます。それに合わせて、登校拒否も多動性障害も、自閉症も増えています。そうすると自閉症だけが特別のものなのかということになってきます。また、児童虐待も1990年代からふえているようなことも見えてきます。

こうした社会背景と関連した見方をしていかなければならないと当時から考えていました。このグラフはそれを裏付けるものです。

テレビ・ビデオの長時間視聴の影響及び電子メディア漬けの影響ですが次の表のとおりです（表5・表6）。

表 5

テレビ・ビデオの長時間視聴の影響

- 仮想と現実の混乱
- 双方向のやりとり、推理・思考力の発達を阻害
- めくもり、感触、におい、立体感を感じることができず、平面的な見方に慣らされる
- だらだらづけは、言葉を聞きながす習慣がつく
- 自分で遊びを見つける力が弱くなる
- アメリカの小児科学会は2歳以下の子にテレビ・ビデオを見せないように警告した(1999)

表 6

電子メディア漬けの影響

- ◆ 乳幼児期（TV・ビデオなど）
 - 仮想と現実の違いが育ちにくい
 - 双方向のやりとり（言葉）が育ちにくい
- ◆ 学童以降（メールなど）
 - メールによるコミュニケーションの台頭
 - 相手の表情を読めないコミュニケーション
 - 自分の姿を現さなくてよい、人を中傷しやすい
 - 集団いじめの心理が働きやすい
 - 相手の傷つきが見えにくい
 - メールが来ないと心配（仲間に帰属しているという安心感）
 - 家族よりも仲間とつながる
 - すぐに返事を返さなければならない（まとまった事に取り組めない、返事強迫感に追い立てられる）
 - ものごとをゆっくり、じっくり考える習慣が失われていく
 - 犯罪に巻き込まれる恐れ

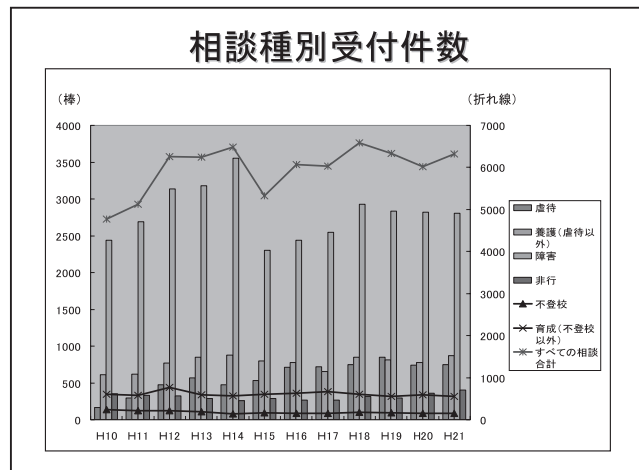
テレビについては小児科学会や小児神経学会が子どもにはあまりテレビを見せないと提言しています。私も禁止しないまでも節度を持った見方をしないと聞いています。

メールについては、顔を見ないコミュニケーションのため、人を簡単に中傷しやすい、それが見えない、気がつかないなど、いろいろな問題を含んでいます。

2) 相談受付等の動向から

名古屋市児童福祉センターの相談種別受付件数は次のグラフのように推移しています（図3）。

図 3



障害相談が平成14年度から15年度に減少しているのは、支援費制度が始まり、短期入所などの相談窓口が区役所になったためで、基本的には障害相談は増えています。

障害種別新規相談の統計をみると広汎性発達障害が全市的に増えています。言語発達遅滞も知的障害も増えている。子どもが減っているのに相談は増えています。

また、知的障害と広汎性発達障害の受診状況を見ますと、平成6年度には知的障害152件、広汎性発達障害86件であったのが、10年度にはそれぞれ203件、156件となり、15年度には218件、575件と逆転してい

ます。また広汎性発達障害のなかで高機能群が占める割合も平成5年度が28%、10年度は37.6%、15年度には65.6%とどんどん増えています。また保育所児童数に占める障害児保育数も増加傾向にあり、すべてが発達障害ではないが、保育園でも保育の困難度の高い子が増えてきています。

その要因を私なりに考えてみたのが次の表です(表7)。
表7

知的障害を伴わない発達障害または類似の子どもが発生に関する要因	
◆ 生得的特性(遺伝、素因)	情緒的接触の希薄化
◆ 機械化・便利化、複雑化する社会	
◆ 共同体から個人生活重視への流れ	
◆ 大家族から小家族化	
◆ 少子化	
◆ 虐待	
◆ 社会的秩序のあり方	→ がまん、規範意識が育ちにくい

今の社会的秩序はまわりの地域も含めてあまり関わらないほうがいい、ダメなものはダメときちっと言える、褒めることもすれば、ダメとも言える、という風潮が薄れている。見て見ぬふりをする。そういうところから我慢とか規範意識が育ちにくなっている。そういうものが何らかの関係をしているのではないかと思います。

3) 親の障害受容に関して

図4

1歳半が怖い母親たち

言葉が遅い、指さしせず…もしかして言葉がなかなか出ないけど、どこが悪いのかしら。1歳半健診で「様子を見ましょう」と言われたけど……。育児不安が「発達障害かも」という不安につながっていく。早期発見・早期療育が自治体の責務とされながら、現実はいかに。

編集 小林明子 写真 小暮 誠

Asahi Shimbun Weekly AERA 2007.11.26 40

これは、2007年11月26日号の「アエラ」の表紙に出ていたものです(図4)。子どもが発達障害ではないかと母親たちは心配するし、周りからも相談を勧められる。そういう親たちが相談に来るのは、診断を受けてスッキリしたいけれども本音は発達障害でないと欲している、もし我が子が発達障害と言われたらどうしてよいか分からないという人が多いことが現実です。

このようなことについてまとめたのが下の表です(表8)。

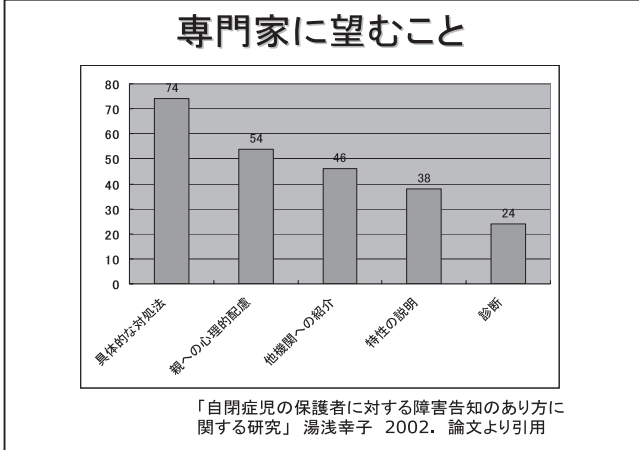
表8

発達障害と診断されるのを恐れる母親たち

- ◆ 言葉遅れ、言っていることが分からない、落ち着きがない、多動、集団の中に入れない、カンシャクが強い、⇒発達障害ではないか?
- ◆ 診断は受けたいが、発達障害ではないと言って欲しい
- ◆ もし、わが子が発達障害だったらどうしてよいか分からない
- ◆ 診断されて障害のせいだと分かり、どうしてなのかと思っていたモヤモヤが晴れた

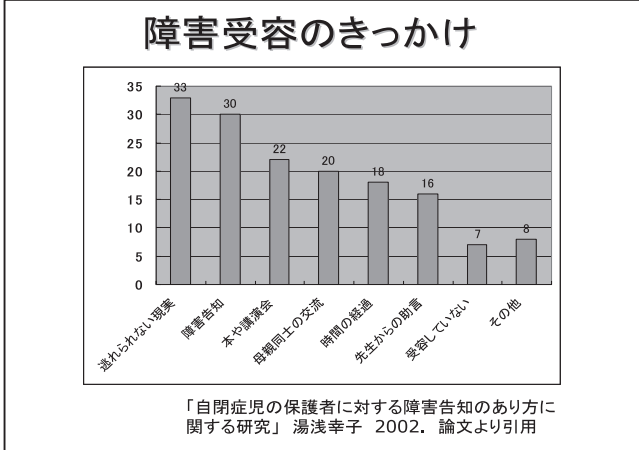
自閉症の障害告知を望んでいるかについての調査(湯浅幸子論文より引用)からは、96%が告知を希望しており、希望しない人はわずか4%ですが、専門家に望むことを問うと、「具体的な対処法」が74%で一番で、「診断」については24%で一番少なくなっています。「告知」という意味はそのままっていいのかわ複雑な思いがあります(図5)。

図5



また、同じ調査で障害受容のきっかけについて尋ねているのが次の図です。「逃れられない現実」が33%となっています(図6)。

図6



次に武部隆さんの著書からの引用を、そういう受け入れ方もあるということで紹介します(表9)。

表9

自閉症の子を持って (武部 隆 著 新潮社 2005)

- ◆ 障害の受容に希望も励みになった
- ◆ 2歳9ヶ月に我が子を、「自閉症ではないか」と医師に問いただし、広汎性発達障害と診断された。
- ◆ 医師は「現時点では障害と断定できない」「適切な訓練をすれば、小学校入学までに他児と変わらないくらい発達する可能性はある」と言ってくれた。
- ◆ この言葉があったからこそ私たち親子は前に進むことができた。
- ◆ 「長男を授かったことで我々家族が失ったものは何だろう……。いま考えると何を失ったかよく分からない。しかし、今まで得たものは数え切れないほどある」

発達障害とは？ということについて私の考えをまとめてみました。

①発達障害とはアンバランスな発達（凸凹な発達）のことを言うのであり、行動特性を集約した概念です。医学的根拠は実はあまりないと私は思っています。

②従って医学的原因に基づく診断ではなく、行動および状態像の診断です。

③遺伝の関与はあるとは思いますが、これがすべてを規定するのではなく、人との関係性の中で育つ部分も大きい。ですからそういうものがあっても、その特性を理解して、その子どもを十分に受け入れ、その子の長所を見てきちんと対応していくことが、その子を育てていくことになります。

それでは、発達障害ブームがもたらしたものにどんなものがあるかを次にあげました（表10）。

表10

発達障害ブームがもたらしたもの

- ◆ 発達障害への理解が進んだ
- ◆ 行動対応の工夫と促進
- ◆ 発達障害者支援法の制定
- ◆ 子どもの問題の殆どを医療ラベル化
- ◆ 正常か 異常か
- ◆ 子育て不安の助長

第一に発達障害への理解が進んだことです。

第二は、行動対応の工夫と促進です。いままでは手探りで、対人関係がうまく持てなかったり、コミュニケーションが持てなかったり、かんしゃくをおこしたり、といったことに関わってきたことが、概念として捉えられてきたことは評価すべきだと思います。

第三にあげられるのは平成17年の発達障害者支援法制定で、これにより発達障害者支援センターが設立され、啓発も進んだと言えます。

以上の三点はいわばプラスの側面ですが、以下の三点はマイナスの側面と言えます。

すなわち、第四として、子どもの問題のほとんどを医療ラベル化したことです。私は医療でラベル化することは、医療的な根拠はないと思いますが、医療ラベル化しようとしています。これは場合によっては家族には受け入れがたいこともあります。

第五の正常か異常かで分けてしまうこと、第六の子育て不安の助長ですが、子どもが育つときには、いろいろな幅があってよいと思いますが、親は、正常かどうか、発達障害と診断されるのかどうか、そればかりを気にするようになってしまいます。

以上が、発達障害ブームの功罪ではないかと思います。

4) 今の子どもたちの動向と居場所

「今の子どもたち」の特性を次の表にあげてみました（表11）。

人間関係を築くことが苦手になっている、家族や地域の絆が弱くなっている中で、安心できる居場所も少なくなっているということで安心感や安定した情緒が育てにくくなっているのではないのでしょうか。

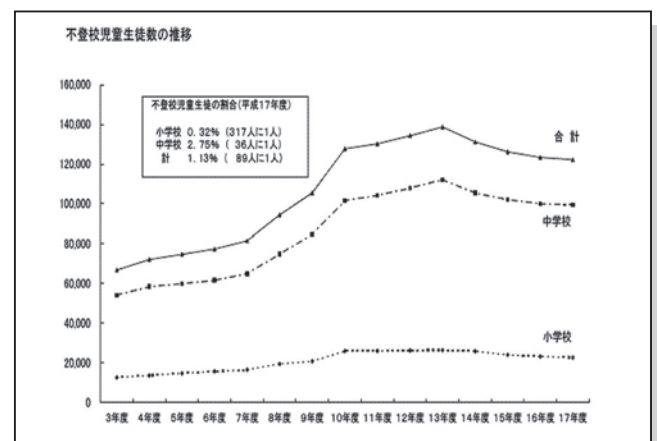
表11

今の子どもたち

- ◆ 自由な発想、枠にとらわれない
- ◆ 個性的
- ◆ 人とうまく関われない子どもたちが増えている
- ◆ キレやすい
- ◆ 学級崩壊
- ◆ 不登校
- ◆ いじめ
- ◆ 電子コミュニケーション、テレビ、ゲーム
- ◆ 家族や地域の絆が弱くなっている
- ◆ 安心できる（自然体で）居場所が失われつつある

次に不登校の推移を見てみると、平成13年、14年で減少しています。ただしこの数字には、学校には来ているが保健室登校の子どもが入っていないので注意する必要があります（図7）。

図7



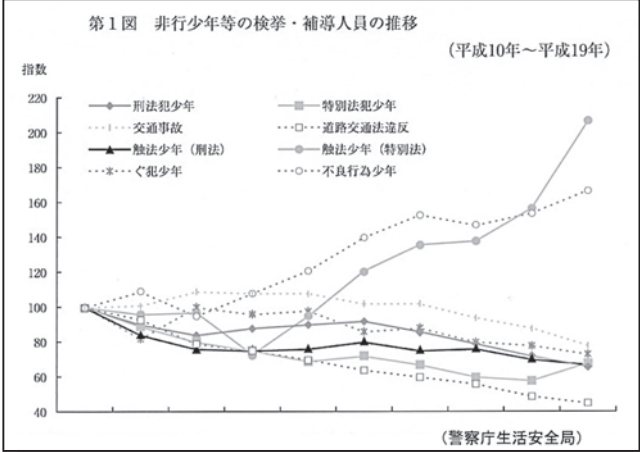
また刑法犯少年人口比、検挙人員とも平成15年から減少傾向にあります。また、殺人、強盗などの凶悪犯少年の検挙人員、及び暴行、傷害などの粗暴犯少年の

検挙人員も減少しています。

しかし、深夜はいかい、喫煙の不良行為少年の補導人員は増加傾向にあります。少子化で修正すると、もっと増えている傾向にあるのではないかと思います。深夜はいかいは家に居場所がないことを想像させます。

平成10年を100とした非行少年等の検挙・補導人員の推移を次のグラフでみてみると、刑法犯をはじめほとんどが減少傾向にあるのに対し、特別法犯（刑法犯以外の犯罪、主に交通法規の違反、軽犯罪）の少年、不良行為少年が増加しています（図8）。

図8



さらに、刑法犯の補導数の統計を学職別にみると、小学生以下が増えており、低年齢化が進んでいる傾向がみられます。また、男女別で見ると、不良行為少年の女子の補導数が増えているのが気になるところです。

「小中高生暴力行為最多」という2008年11月21日の新聞記事のなかに、

「愛情を注がれずに育った自己肯定感のない子が突然切れている。最近は集団と折り合いをつけない子が増えている。かつての校内暴力は思春期の中学生が、がんじがらめにする大人や社会に反抗していた。しかし今は違う。原因は集団と折り合いをつける力が育っていない子の増加による」

との記述があります。

それでは、先ほどから述べている居場所とは何か、現代の子どもにとっての居場所について次のようにまとめてみました（表12）。

表12

居場所とは
1) 安心感、信頼感、安らぎがある
2) 自分を出せる
3) 応答性がある
4) 役割がある
5) 逃げ場がある
⇒ 安定的な情緒が育ち、 力を出せる、我慢ができる

子どもが成長するときには、絶対的安心感、安全感というものが必要なのです。それが揺るぎだしているのが今の時代なのではないでしょうか。それがないと何かに興味を持つとか、行動するという意欲が出てこない。

また、自分が何かを訴えればそれに対して応答があることが存在を感じることであり家族の中で役割のあることも居場所を感じることであります。

そして、家族とは何か。家族とはひとりではない。自分の存在が当然としてある。家族とは特別なものではなく、空気のような存在であるといえます。

虐待を受けた子どもへの影響として次のようなことが指摘できます（表13）。

表13

虐待を受けた子どもへの影響
◆ 不安、怒り
◆ 自己肯定感がもてない
◆ 情緒面が育ちにくい
◆ 人と信頼関係を築くことが困難
◆ 発達の障害
◆ 学習の障害
◆ 反社会的行動(非行)
◆ 精神的不安定

5) 子どもが育つということを考える

一番大切なことは、期待感すなわち基本的信頼感です。これがなければ子どもは育たないと言えます。母と子の間の応答性が育って初めて母子分離が可能となります。母子分離とは強引に引き離すことではなくて関係性をつけて離れていくことです。

次に「おかあさんになるってどんなこと」という詩（内田麟太郎）をあげてみましょう（表14）。

表14

おかあさんになるって どんなこと
◆ 名前を よぶことよ
◆ こどもと 手をつないで 歩くことよ
◆ 心配すること
◆ お熱が下がらず 一晩中 寝ないで看病しました
◆ 朝になり お熱が下がり 思わず ぎゅっと 抱きしめました
◆ 思わず 涙も ながれました

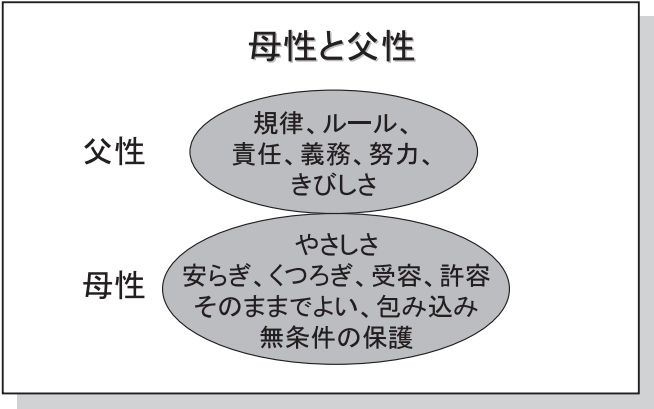
子どもの心を育てるのは家にいつもおかあさんが待っているという絶対的安心感があって、その上に自尊感情が育つのであり、これなくして自尊感情は育たないと言えます。

対人関係、社会性を育てるには、双方向の関わりができ、人を思いやる心が育ち、その上で、社会ルール

の習得が可能になる。いきなり社会ルールを習得することはできないのです。

母性と父性の関係についての図を次にあげました(図9)。

図9



母性が先にある父性を重ねることが重要で、母性だけでは規範やルールなどの社会性は育ちにくい。母親だけでも母性・父性はあるし、父親だけでも母性・父性があります。

「子育てを通して親も育つ」ということについて、中京大学の鯨岡先生の講演から考えてみます(表15・表16)。

この中で中心的なことは、子どもの心は人との関係を通して育つものであり、大事なことは、自己の存在を認められ大切にされることによって自身の肯定感が育まれ、他者への信頼感も生まれていくということです。

表15

子育てを通して親も育つ①

- ➡ 周りの人との関係において子どもの心が育つ。周囲の人々の中で自己の存在を認められ、大事にされ、自身の肯定感を育んでいく。そして他者への信頼感も生まれていく。
- ➡ 重要な人との日々の関係の中で、重要な人についての内的イメージが出来上がってくる。
- ➡ 最初から親だった人はいない。子どもを育てることを通して次第に親らしくなっていくものであり、最初から完璧に子育てができる親はいない。子どもが未熟なときは親も親としては未熟なのです。特に核家族の親たちには多面的なサポートが必要と考えるべきです。

(中京大学 心理学教授 鯨岡 峻 の講演より)

表16

子育てを通して親も育つ②

- ➡ 子育ての難しさは、「自分の思い通りに」やりたいという思いにとらわれるからである。
- ➡ 子育てには自分の思い通りにならない面が必ずあり、子どもは自分とは違う考えや思いを持った一人の人間として尊重する必要があるという理解が要る。
- ➡ 自己実現や自己決定が重視されるようになった社会風潮と相手への尊重姿勢の弱体化との関連が、現代の子育ての難しさを映していないだろうか。

(中京大学 心理学教授 鯨岡 峻 の講演より)

終盤にあたり、少しまとめさせていただきます。今の時代背景の一つでもある、自分勝手にできるようになった親たちについて考えてみたいと思います。

かつての「母親とはこうあるべきである」「子どもに対して母は我慢しなければならない」ということから自由になった。自由になった分自分で考えねばならない、という逆説的な困惑を持たざるを得なくなっています。

地域社会における支援体制として、一つは、子育て、子育ての支援体制の充実が必要になっています。もう一つは、非自然から自然への回帰が大事になってきているということです。

私は、子どもの心を育てるのは技術ではない、子どもの心を育てるのは、人であり、その子どもの人間性をきちんと認め、ほめることができ、熱い思いを持って叱ることができ、そして愛情(共感)を注ぐことができる人である、と考えます。

最後に、次の相田みつをさんの詩(表17)をお示しして、私の話を閉じたいと思います。

表17

育てたように 子は育つ

(相田みつを)

平成22年度 西部地域療育センター連続講座のご案内

第2回 講演会

講 師 南部地域療育センターそよ風所長 堀江 重信氏（小児科医）
「遊び・童謡・発達」
日 時 平成22年11月26日（金）PM3：30～5：00
会 場 西部地域療育センター1階 多目的ホール
対 象 保育園、幼稚園、小学校、療育施設、関係機関の職員のかた

..... 講師からのコメント

テーマは「遊び・童謡・発達」

遊び及び童謡の歌詞が子どもの発達とともにどのように変わっていくか、また逆に遊びと童謡の歌詞を通して子どもの発達がわかるようにお話ししたいと思います。

ボランティア募集

保育場面での手助け（室内の活動、園外への散歩など）
教材づくり
保護者活動時における療育児のきょうだいの保育
センター行事（運動会、夏祭りなど）のお手伝い
その他、園の環境整備など

■お問合せ・お申込み■

名古屋市西部地域療育センター